

縄文時代早期末「膳棚B式」の設定と 「プレ塚田式」の理解に向けて

中 沢 道 彦

Ⅰ はじめに

川原田遺跡の調査では焼町土器（焼町式土器）の良好な資料の影に隠れながらも縄文時代早期Ⅲ群とした早期末の土器群が一定数検出された。早期末の土器群では縄文地文に絡条体が押圧されたもの、沈線が施されたもの、低隆帯が貼付されたものなどが主体となり、それぞれ縄文施文手法、胎土、色調が類似する。これらは包含層出土資料であり、遺構一括資料ではないが、極めて近似した時間幅の資料と類推されよう。

筆者はこれまで御代田町塚田遺跡、戻場遺跡出土の資料報告に関わる際に中部高地における早期末の土器編年案を簡単に述べたことがある（中沢1994、中沢・賛田1996）。その際、早期末でも最終末の資料として長野県岡谷市梨久保遺跡23号・75号住居出土資料を想定し、23号住居出土資料ではbからaと遺構の切り合いから、75号住居では覆土から暗褐色下層出土資料と層位差からその細分の可能性を指摘した。23号住居aでは撚糸文地文の絡条体圧痕文土器が、aを切るbでは縄文施文土器と羽状縄文に刻みを持つ細い隆帯が貼付される土器が出土し、aとbの資料が混在するものでは絡条体条痕、撚糸文地文、羽状縄文などの縄文地文の絡条体圧痕文土器と東海地方早期末の石山式、天神山式が出土した。75号住居下層の覆土でも絡条体条痕、撚糸文地文、羽状縄文などの縄文地文の絡条体圧痕文土器と石山式、天神山式が、その上層の暗褐色土下層では縄文地文に刻みを持つ細い隆帯が貼付される土器及び無文上に刻みを持つ細い隆帯が貼付される土器がまとまっている。中部高地では早期末でも末の石山式、天神山式併行では絡条体圧痕文土器の地文に縄文が多用され、それに撚糸文地文のものが一定数組成するようである。梨久保遺跡例より古い、入海Ⅱ式もしくは石山式が伴う岡谷市膳棚B遺跡1号住居では絡条体条痕、撚糸文地文、内面ナデ調整のものが主体で縄文施文の有無、もしくは多寡という視点ではその様相を異にする。

さて筆者は前述の早期末の土器編年に触れる際に、諸氏が考察した絡条体条痕から撚糸文、そして縄文地文へと地文の主体が変遷する視点に基本的に従った上で、その地文・調整による変遷案の問題点にも触れた。地文・調整による変遷案での精度を高めるためにも、ご破算にすべき議論が見受けられたからである。また梨久保遺跡23号住居、75号住居、松本市坪ノ内遺跡、御代田町塚田遺跡出土の縄文地文が出現、盛行し、器面、また隆帯上に絡条体が押圧される土器群をもって前期初頭「塚田式」の成立母体となる土器群と評価した。後述するが、本稿で仮に「プレ塚

田式」と扱う土器群である。本遺跡出土の早期末土器群もこれらと同類の資料といえよう。

本稿においては、本遺跡出土の早期末土器群の位置づけを明確にすべく、まず中部高地の早期末の土器編年における地文・調整による変遷案の有効性と限界、その問題点を整理し、更に今後の中部高地早期末土器編年再編に向けての布石として「膳棚B式」なる新型式の設定を試論として試みる。そしてそれに後続する前述の「プレ塚田式」と仮称した土器群について簡単に触れ、「塚田式」との関係論を論ずる。将来的にこれにしかるべき概念を与えるための基礎作業としたい。

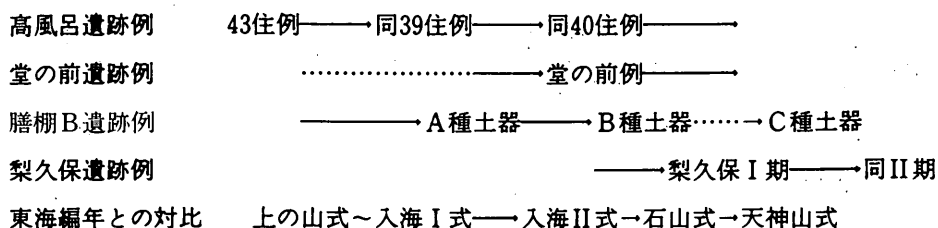
2 中部高地における早期末土器群研究の一課題

(1) 地文変遷案の再検討

1982年の神奈川考古学会主催の早期末シンポジウム以降、1959年に岡本勇が指摘した茅山上層式から前期初頭花積下層式までの型式の空白は広く認知され、中部高地でも今日に至るまで早期末に関する幾つかの編年案が呈示されている（百瀬忠1988、宮下1989、小熊1989、綿田1993・1996、中沢1994、中沢・賛田1996）。

さてここで筆者が関わったものも含め中部高地に関するこれらの論稿を概観するにつけ、ある傾向が看取される。それは東海の早期末土器編年への依存と、地文・調整の変化による変遷案への傾斜である。勿論、絡条体原体に着目した視点（百瀬1988、小熊1989）、隆帯による型式学の視点（中沢1994、中沢・賛田1996）などを併用する見解もあるが、この両者への傾斜が全体的傾向として否めない。本来ならばしかるべき一括資料をもって「地方差、年代差を示す年代学的単位」たる型式の設定を行い、それを単位として型式学的検討を行うべきと考える。しかるに本稿でも試論として「膳棚B式」なる一型式は設定して議論をすすめるが、現状では一括資料の不足、中部高地の早期末の土器群で5、6型式分、型式設定を行うにしても面の広がりの問題にまだ検討の余地がある点、絡条体圧痕による文様の型式学的検討を試みるにつけ、数型式相当の時期にわたり同じ文様意匠が連続し、時期の識別を困難にさせている点など様々な課題がある。正攻法の研究法のみならず、実際問題としてその研究現状を鑑みるに東海編年への依存と地文調整の変化への傾斜も止むなしと考える。少なくとも東海編年に則した中部高地の該期土器群のそれぞれの地文・調整手法の出現時期は規定できる訳である。ただし、問題は遺跡で共伴した東海系土器群の識別に研究者間の理解に齟齬を生じており、東海編年と中部高地土器群の地文・調整の変遷との整合に共通認識を欠く点にあらう。むしろ本稿では地文・調整の変化の問題について積極的に捉え、研究現状での問題点を整理したい。

中部高地の早期末土器群について地文・調整の差異に着目し、その変遷を想定した嚆矢は佐藤信之による原村阿久遺跡での考察である（笹沢・佐藤他1982）。「口縁部文様帯として絡条体圧痕



第1図a 百瀬忠孝の編年案

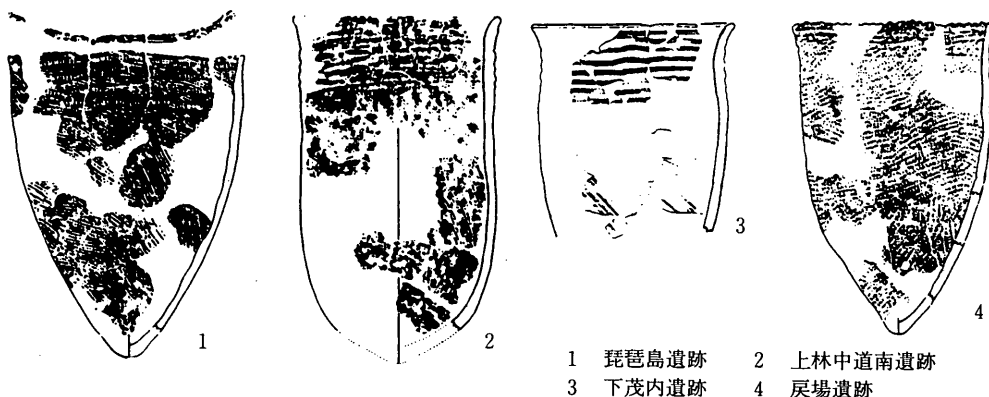
段 階	推定時期	第1類	第2類 条痕文			第3類	第5類	第6類								
		絡条体 圧痕文	a種	b種	c種	縄文	東海系	撚糸	側面 圧痕							
古 段 階	柏畑式	a 種 条 痕	内 外 面 施 文	内 面 施 文 や 減	内 面 施 文 や 減	内 面 b・c 種 条 痕			内 面 b 種 条 痕							
	上の山式															
新 段 階	入海Ⅰ式									b 種 条 痕						
	入海Ⅱ式															

第1図b 綿田弘実の編年案

文をもつ土器の一群は、貝殻条痕をもつものから、絡条体条痕を施すもの、そして撚糸文へと変遷した可能性を予測できよう。」この佐藤の指摘がその後の中部高地の早期末土器編年に大きな指針を与えることとなる。

佐藤による指摘以降、代表的な地文による変遷案としては百瀬忠幸、綿田弘実によるものが挙げられる。百瀬忠幸は早期末絡条体圧痕文土器の出現を上の上の山式併行とした上で、早期末土器群をA種（裏面に条痕文をとどめ、胎土に多量の繊維を含むもので、「イモ虫」状の絡条体圧痕文が横位モチーフを中心に描かれる）からB種（横方向、山形、「X」字状のモチーフを構成し、器内面に条痕文を伴わないもの）、更にC種（B種同様裏面に条痕をもたず、よりていねいな器面調整が行われるもの）に変化すると考え、B種で撚糸文が出現、C種では撚糸文手法が確立するとした。そしてA種を東海編年の上の山式から入海Ⅰ式、B種を入海Ⅱ式から石山式、C種を石山式から天神山式併行と考えた（百瀬他1987・1988）（第1図a）。百瀬による地文調整分析の新視点はA種からB種への変化での内面調整の有無による区分である。早期末でも最終末の時期では外面縄文、内面絡条体条痕の土器も一定数確認される面はある。しかし早期末でもある時期に限れば百瀬の指摘どおり内面調整の有無は時期差となる可能性はある。

ただ筆者は百瀬による変遷案とは見解を異にする部分をもつ。まず百瀬は中部高地での早期末の絡条体圧痕の出現を上の上の山式併行以降とするが、筆者はそれを茅山上層式、場合によれば茅山



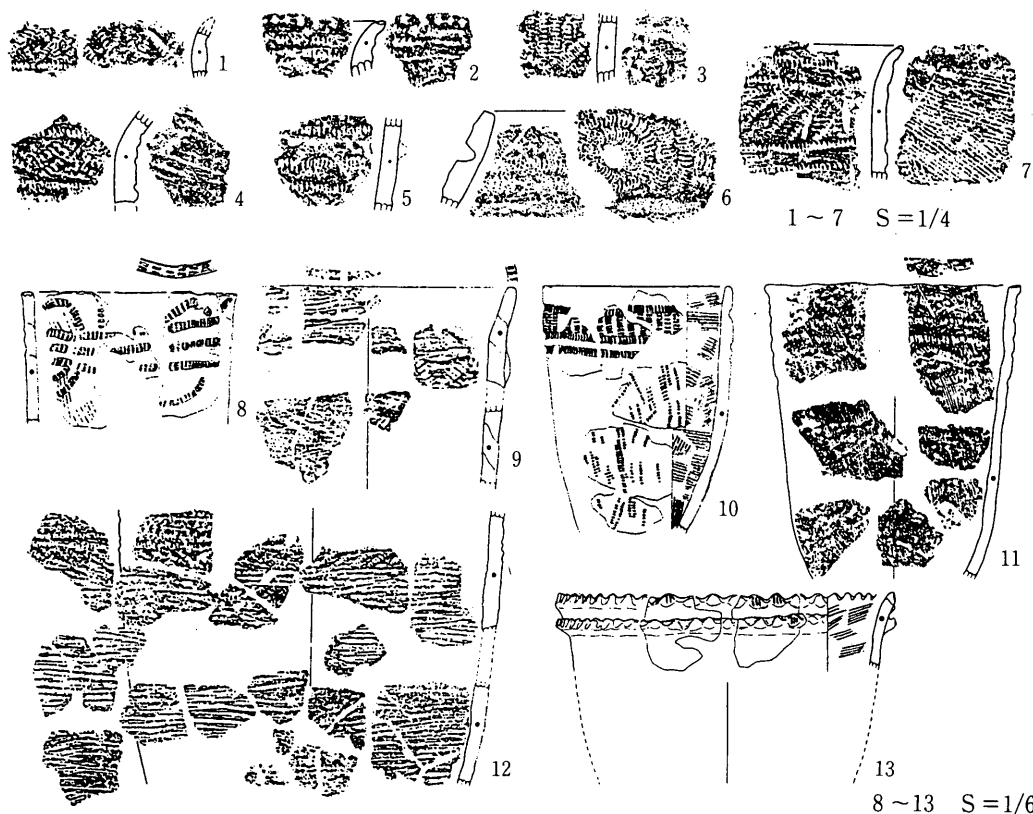
第2図 横位多段構成の絡条体圧痕文土器

下層式併行と考える。これについては既に笹沢浩による先駆的な業績（森島・笹沢1975）があり、また多くの研究者の見解も同様である（守矢1986、金子1989・1991、小熊1989、綿田1993・1996）。筆者は和田村男女倉遺跡C地点SK11、SK15また松本市桜田遺跡遺物集中地点での絡条体圧痕文土器と粕畑式との共伴、岡谷市下り林遺跡の茅山上層式に絡条体が押圧されている点をその根拠とする。

次に文様意匠について、百瀬はA種からB種への変化で横位モチーフ中心から横方向、山形、「X」字モチーフへの変化を想定したが、筆者らは早期末では横位多段構成の意匠をもつ絡条体圧痕文土器が数型式と多時期にわたるものと指摘した（中沢・賛田1996）（第2図）。またX字状や鋸歯状の意匠も茅山上層式併行の男女倉遺跡SK11・15や桜田遺跡出土資料から入海II式から石山式併行の膳棚B遺跡出土資料と多時期にわたり、連続的に確認される。よって百瀬による横位中心から、横方向・山形・「X」字へと絡条体圧痕文の意匠が変化するという案には賛同できない。

また茅野市高風呂遺跡出土資料の扱いで、百瀬は43号住居を茅山上層式から上の山式、39号住居を入海I式、40号住居を入海II式から石山式に併行を考えているが、39号住居を茅山上層式から上の山式、それを切る40号住居を坂北村向六工遺跡併行、つまり上の山式併行に考える（中沢1994、中沢・賛田1996）。

佐藤、百瀬による地文調整による変遷案をより概念化したのが綿田弘実である。綿田は向六工遺跡の報告で地文の種類と内外面施文の有無により早期末絡条体圧痕文土器の細分を試み、「古段階は粕畑式・上の山式段階で、貝殻条痕文を含む粗大な条痕文を内外面に施文する時期である。中段階は入海I式・入海II式段階で絡条体圧痕文を内外面に施文する時期である。新段階は石山式・天神山式段階で、撚糸文を外面のみに施文する時期である」とする3段階の変遷案を提示した（綿田1993）（第1図b・第3図）（註1）。



第3図 坂北村向六工遺跡出土資料

綿田に対する見解の相違を筆者は既に述べている。まず筆者らは松本市桜田遺跡、茅野市高風呂遺跡39・43号住居、牟礼村丸山遺跡出土のほぼ茅山上層式併行となる資料の条痕調整を検討し、それらの多くがその調査報告での指摘のとおり絡条体条痕が用いられている点、また従来中部高地の早期末土器で「条痕の幅の広いもの」「粗大な条痕」とされたものの多くが絡条体条痕である点を確認し、中部高地では早期末の絡条体条痕の出現が絡条体圧痕の出現と期を一にする点を指摘した。そして向六工遺跡出土資料を、貝殻条痕・「粗大な条痕」のものが上の山式併行、絡条体条痕のものは入海Ⅰ式併行と区分する綿田の見解に対し、向六工遺跡出土資料の大半は上の山式併行とする立場を示した（中沢1996）。

なお最近の綿田の論稿では「古段階」の概念に変更がなされ、「貝殻条痕や絡条体条痕が内外面に施文されるもの」と扱っている（綿田1996）。「中段階」は「絡条体条痕が内外面に施文されるもの」と前稿と同じだ。「古段階」、「中段階」の基準資料たる「向六工遺跡古段階」、「向六工遺跡新段階」の区分は「粗雑な条痕」の「a種条痕」と「やや細かい絡条体条痕」の「b種条痕」によるとする。とすれば「粗大／粗雑」な「a種条痕」も絡条体条痕と認めた上で、絡条体条痕の条の幅と精粗で分類、時期差を認めたと理解すべきであろう。ちなみに報告書で確認する限り、

東海の上の山式の良好な資料が出土した向六工遺跡「上段分布帯」では「やや細かい絡条体条痕」の「b種条痕」が一定数出土している。綿田分類の「粗雑／粗大な（絡条体）条痕」と「やや細かい絡条体条痕」に微妙な時期差がある可能性は否定しないが、向六工遺跡出土資料に限ればこれらが組成し、主に上の山式併行となろう。綿田の「やや細かい絡条体条痕」のみを入海Ⅰ式併行に扱う見解には首肯しかねる。

また綿田は撚糸文・縄文地文の出現を入海Ⅱ式併行とした上で、向六工遺跡26号住居出土資料を「中段階後半」つまり入海Ⅱ式併行、そして膳棚B遺跡1号住居出土資料の主体を石山式に置き、「新段階前半」の基準資料とした。撚糸文が絡条体条痕から出現、つまり同じ絡条体の原体を引きずる手法から回転する手法へと変化する点、またその出現が入海Ⅱ式併行である点は現状での研究者の共通認識といえよう。ただ膳棚B遺跡1号住居出土資料を百瀬は入海Ⅱ式から石山式の過渡的な時期のものとしており、その扱いは微妙である。

地文絡条体条痕の絡条体圧痕文土器に外面縄文、内面絡条体条痕の土器が伴う向六工遺跡26号住居出土資料についても、筆者はそれを上の山式併行と扱う。松本市桜田遺跡で茅山上層式併行の外面縄文、内面絡条体条痕の土器が一定数ある限り、向六工遺跡の外面縄文、内面絡条体条痕の土器もその系統のものとする仮説も可能である。茅山上層式併行の縄文地文の系統はおそらく野島式併行の「古屋敷遺跡早期第Ⅳ群」の縄文尖底土器、鶺鴒ヶ島台式に組成する縄文土器、茅山下層式の縄文土器と連続する中部高地の伝統的な手法といえよう（阿部1989・1990）。その伝統的な手法が上の山式以降には、茅山上層式までの盛行状況ではないにしても、僅かながらに存在することは予想しうることである。そして僅かながらに残存する縄文地文の伝統が再度展開するのが石山式から天神山式にかけての時期であろう。これは前述の梨久保遺跡23号・75号住居出土資料での状況が根拠となる。小熊博史の指摘のとおり、中部高地の早期末土器群でこの時期以降に縄文施文手法が卓越する現象は東北の「縄文条痕土器」の影響と考えるべきであろう（小熊1989）。ただ上の山式から入海Ⅱ式併行までで中部高地に断片的に存在する縄文地文のものは現状の資料蓄積では中部高地の伝統的な手法の系統を引くものとするのが妥当ではないか。現状の資料蓄積では何ともいえないが、石山式か天神山式以降に卓越する縄文手法についても、在地で僅かながら伝統的に残存する縄文手法が東北の「縄文条痕土器」の影響を受け、再度卓越するという仮説も可能である。今後、茅山上層式以降の縄文手法の連続性の確認と中部高地での早期末土器群と東北の「縄文条痕土器」との縄文原体、施文手法、施文方向等の比較検討作業が必要になるだろう。

佐藤の示した指針以降、中部高地の早期末土器群の編年では地文調整に関する分析視点に重きをおかれる訳であり、これまでその代表的な研究者である百瀬と綿田による変遷案について触れ、また筆者の見解を述べてきた。以下に中部高地早期末土器群の地文調整に関して筆者の立場を要

点的に述べる。

- ① 絡条体条痕の出現は絡条体圧痕の出現と時期を同じくする。桜田遺跡、高風呂遺跡、丸山遺跡などの状況を確認する限り、茅山上層式併行でそれらが出現する。
- ② 絡条体条痕から撚糸文に変化する点は研究者の共通認識といえる。撚糸文の出現は膳棚B遺跡での状況から入海Ⅱ式併行であろう。
- ③ 縄文施文は茅山上層式併行までは中部高地で卓越する伝統的な手法である。上の山式併行以降もその系統が僅かながらも残存する可能性は高い。その伝統を母胎とし、石山式か天神山式併行の時期に東北の「縄文条痕土器」の刺激で中部高地でも縄文施文が再度盛行する。その早期末でも最終末の縄文施文土器が前期最初頭「塚田式」の成立母胎となる。

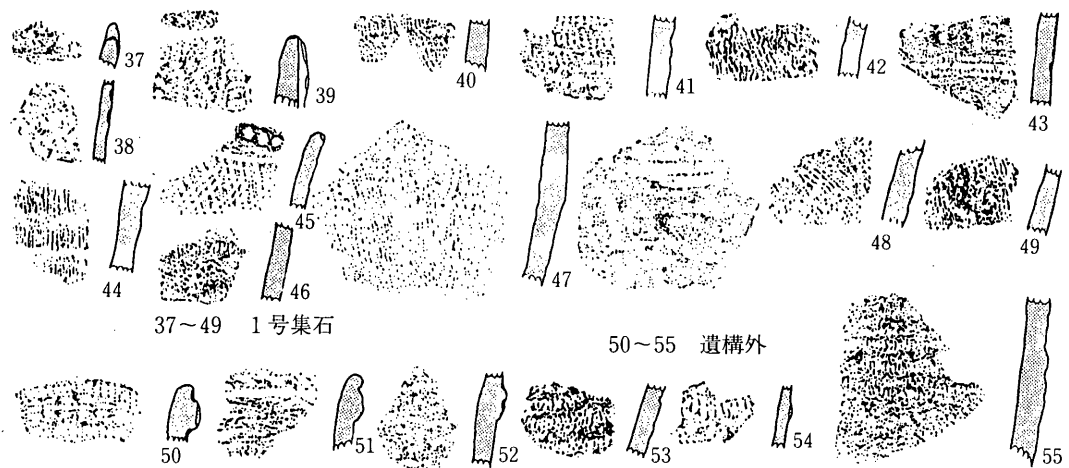
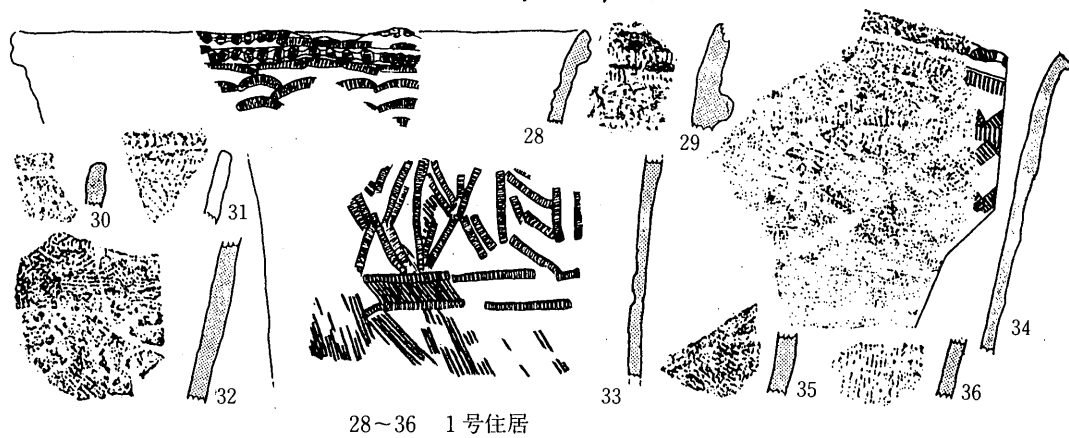
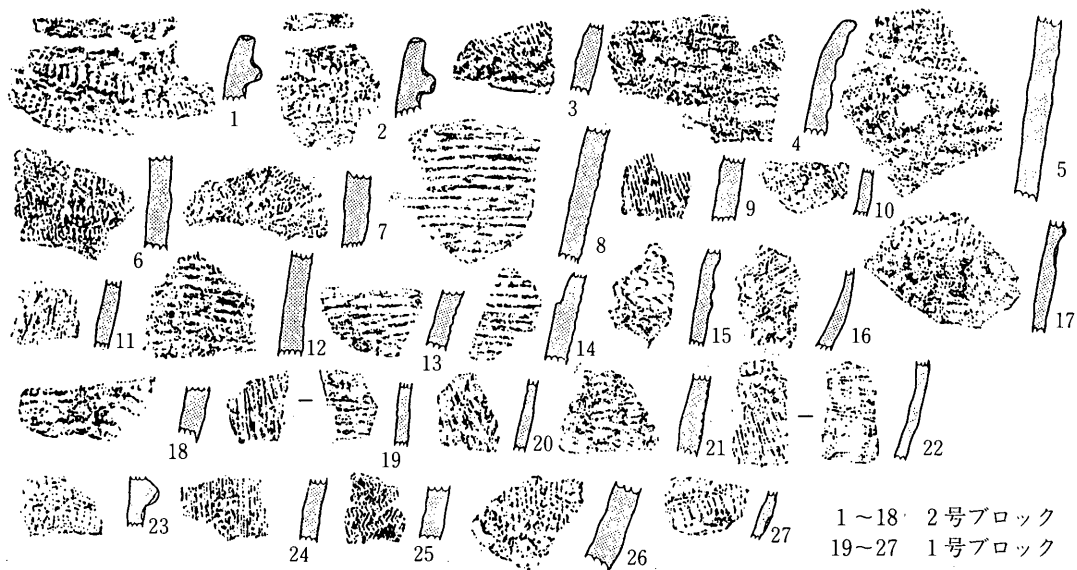
(2) 「膳棚B式」の設定に向けて

先に地文調整による変遷案の再検討を行い、絡条体条痕から撚糸文へ変化する点、それが現状では入海Ⅱ式併行で撚糸文が出現する点を研究者間の共通認識として確認した。その状況を最も端的にしめすのが膳棚B遺跡出土資料といえよう。

膳棚B遺跡では1号住居、1号集石の遺構、1・2号ブロックの遺物集中地点、また包含層から外面絡条体条痕、もしくは撚糸文、内面ナデの絡条体圧痕文土器が東海の入海Ⅱ式、石山式を伴い出土した。各遺構、遺物集中地点、また包含層で微妙な時期差がある可能性は高いが、遺跡全体の土器様相に大きな差異はない。地文調整の他、口縁部上位に絡条体が押圧された発達した隆帯をもつもの、横位多段構成、山形、弧状、「X」字の絡条体圧痕文などが組成する。伴出する東海系土器も入海Ⅱ式、石山式と連続する2型式で、遺跡全体の出土資料が短時期のものといえる。また詳しくは後述するが、地文調整以外の隆帯の形状、その貼付部位、絡条体圧痕の意匠などに着目しても、周辺地域の資料を瞥見するに岡谷市海戸遺跡、明科町ほうろく屋敷遺跡、駒ヶ根市門前・的場遺跡などにおいて類似資料が確認される。面的な広がりも追えそうだ。筆者は本稿で中部高地の縄文時代早期末の土器型式として以下に膳棚B遺跡出土資料を基準として「膳棚B式」なる型式を提唱する。

岡谷市膳棚B遺跡は塩嶺山地山麓の扇状地上に立地し、中央自動車道長野線の建設に伴い発掘調査が行われた。早期末の遺構はⅣ層砂礫層、Ⅴ層黒褐色土層で検出され、遺物集中地点の遺物は第Ⅲ層黒色土層から第Ⅴ層上面の垂直幅20cm前後で分布がまとまった。以下に出土資料について筆者なりの分類案を示す。

膳棚B遺跡早期第Ⅰ群土器 膳棚B遺跡出土の早期末の土器群を一括した。a種 絡条体条痕、b種 その他の条痕、c種 撚糸文、d種 無文の地文である。この早期第Ⅰ群1類から9類をもって「膳棚B式」とする。



28以外 S=1/4

第4図 岡谷市膳棚B遺跡出土資料

1 類 (第 4 図 1、2、23、28、29、50～52)

口縁部直下に横位の隆帯が貼付され、隆帯、器面には絡条体が押圧される。隆帯の区画で横方向に絡条体が圧痕される。隆帯下、器面の絡条体圧痕は弧状、横位多段などの意匠となる。地文には a 種 絡条体条痕、b 種 その他の条痕、c 種 撚糸文、d 種 ナデなどによる無文がある。

2 類 (第 4 図 34)

口縁部直下に折り返し状の隆帯が貼付され、隆帯、器面には絡条体が押圧される。隆帯下、器面の絡条体圧痕は横位及び山形、「X」状が組み合わさる意匠となる。地文は d 種 無文となる。

3 類 (第 4 図 39)

口縁部から垂下する隆帯が貼付され、隆帯、器面には絡条体が押圧される。地文には a 種 絡条体条痕、c 種 撚糸文などがある。

4 類 (第 4 図 5 ?、6、7、25 ?、33)

絡条体圧痕が「X」状、横位、縦位の組み合わせる意匠で施される。地文には a 種 絡条体条痕、b 種 撚糸文、c 種 ナデなどによる無文がある。

5 類 (第 4 図 4、40、41、53、55)

絡条体圧痕が横位多段の意匠で施される。地文には a 種 絡条体条痕、b 種 その他の条痕、c 種 撚糸文、d 種 ナデなどによる無文がある。

6 類 (第 4 図 43)

絡条体圧痕が横位、縦位の組み合わせによる「井げた」状の意匠で施される。

7 類 (第 4 図 45)

沈線文土器で、1 点のみである。口端部に刺突がなされ、格子状に沈線が施される。

8 類 (第 4 図)

爪形文土器である。

9 類 (第 4 図 8～9、12～14、18、19、24)

a 種 絡条体条痕、b 種 その他の条痕、c 種 撚糸文、d 種 ナデなどによる無文である。

1～7 類の胴部破片のものも多いと推定される。

膳棚 B 遺跡早期第 II 群土器 膳棚 B 遺跡出土の早期末の東海系土器を一括した。

1 類 (第 4 図 15、17、22、27、31、54)

入海 II 式土器である。

2 類 (第 4 図 38)

石山式土器である。

3 類 (第 4 図 10、11、16、19、20)

ナデによる薄手無文土器で、入海 II 式か石山式のものであろう。

ではこれらの遺跡での出土状況を確認しよう。

2号ブロック

2号ブロックでは口縁部上位に横位の隆帯をもつ1類(第4図1、2)、X状、横位、縦位が組み合わさる意匠の絡条体圧痕をもつ4類(第4図5?、6、7)、横位多段構成の絡条体圧痕をもつ5類(第4図4)、絡条体条痕、撚糸文の9類(第4図8~14)が出土し、これらに入海Ⅱ式が伴う。

1号ブロック

1号ブロックでも口縁部上位に横位の隆帯をもつ1類(第4図23)、絡条体条痕、撚糸文の8類が出土し、これらに入海Ⅱ式が伴う。

1号住居

1号住居では口縁部上位に横位の隆帯をもつ1類(第4図28、29、30?)、口縁直下に折り返し状の隆帯をもつ2類(第4図34)、X状、横位、縦位が組み合わさる意匠の絡条体圧痕の4類(第4図33)などが出土し、これらに報告者の百瀬忠孝によれば入海Ⅱ式から石山式への過渡的な様相を示す土器が伴う。

1号集石

1号集石では垂下する隆帯をもつ3類(第4図39)、横位多段構成の絡条体圧痕の絡条体圧痕の5類(第4図40?、41)、横位、縦位の組み合わせによる井げた状の意匠の絡条体圧痕の6類(第4図43)、口端部に刺突をもち、以下格子状の沈線が施される7類(第4図45)が出土し、これに石山式が伴う。なお1号集石からは块状耳飾りも出土しているが、これが石山式併行とするならば、中部・関東では最古級のものとなろう。

その他包含層では1類(第4図50~52)、4類(第4図53、55)、第Ⅱ群1類の入海Ⅱ式(第4図54)などが出土する。

まず1・2号ブロックについては小破片ながら1類、9類で共通し、入海Ⅱ式を伴出する。1・2号ブロックについてはほぼ同時期とみてよい。次に入海Ⅱ式に後続する1号集石では垂下する隆帯の3類や6類、7類が他にないものというが、6類は4類の一部の可能性もあるし、7類は早期末より古い可能性もある。ここでは垂下する隆帯の3類のみを他にないものと認識できる。なお1号集石では横位の隆帯をもつ1類を欠くが、口縁部上位にある横位の隆帯が塚田式の隆帯の一類型に連続する点を考慮すれば、確実に石山式併行でも1類の存在は予想される。

さて問題は1号住居の扱いである。1号住居では口縁部上位に横位の隆帯をもつ1類や2類、4類などが出土し、これに第4図31の東海系土器が伴う。31は低隆帯上に爪形文が施される。隆帯は貼付されたものではなく、器面の微妙な高まり程度のものである。入海Ⅱ式か石山式か断定しかねる。膳棚B遺跡全体では入海Ⅱ式が石山式より量的に多い。ただ1号住居出土の絡条体圧

痕文土器を、入海Ⅱ式併行の1・2号ブロックのそれと石山式併行の1号集石のそれと比較してもいずれか一方のみとの類似を十分に指摘できない。1号ブロックの1類と1号住居址の1類では、前者は隆带上斜位に7mm前後の間隔をあげ、後者は隆带上縦位に5mm前後の間隔をあげ絡条体が押圧される差異はあるが、明確なことはいえない。1号住居は入海Ⅱ式から石山式併行の大枠で捉えざるを得ない。よって、膳棚B遺跡での出土状況で判断する限り、「膳棚B式」は東海編年で対比すると入海Ⅱ式から石山式併行となる。

では「膳棚B式」と比定できる他の遺跡の出土資料を確認しよう。

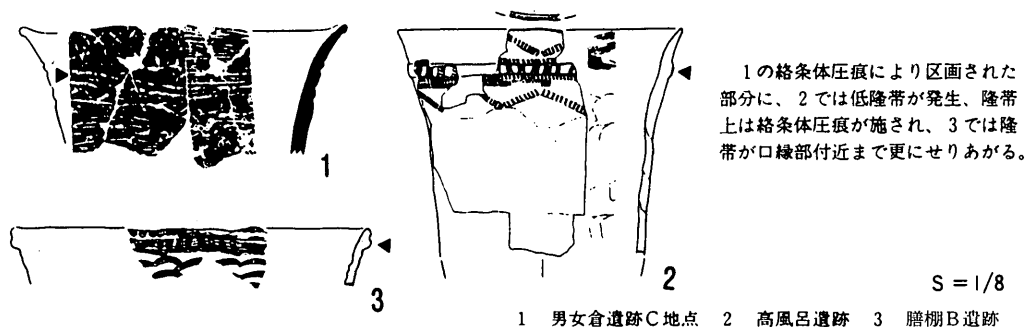
長野県明科町ほうろく屋敷遺跡 ほうろく屋敷遺跡では第5図5と6が最下層で共伴し、資料は綿田により紹介されている（大沢他1991・綿田1996）。一括資料に近い出土状況である。第5図5は口縁部上位の隆帯に縦位に絡条体が押圧され、隆帯以下器面は弧状に絡条体が押圧される。地文は撚糸文である。口縁部上位に隆帯をもつ点では「膳棚B式」1類に相当する。1類の隆帯の発生についての見解を筆者は既に述べている（中沢1994、中沢・賛田1996）（第6図）。茅山上層式併行の男女倉C遺跡例で横位に平行する文様区画の絡条体圧痕文が茅山上層式か上の山式併行の高風呂遺跡39号住居例で低隆帯が成立、隆帯には縦位に絡条体が押圧され、装飾の意味をもちだす。隆帯の部位もやや上昇気味となる。「膳棚B遺跡」1類の隆帯もこの系統のものである。器面では山形と弧状に絡条体が押圧される。山形は4類と、弧状は1類の第4図28の隆帯下の文様と共通する。6は垂下する隆帯をもち、器面にはX状、山形、横位に絡条体が押圧される。6は垂下する隆帯では3類に共通し、器面の絡条体圧痕文の意匠では2類、4類と共通する。5、6とも「膳棚B式」と理解できる。かつ「膳棚B式」でも後半のものと理解できよう。

長野県駒ヶ根市市場・門前遺跡 的場遺跡土壙270では第5図7が11の石山式と10の縄文施文かつ波状文が施される天神山式系土器に伴い出土、土壙276では第5図8と9が出土した（林他1995）。7は口縁直下横位2条2単位に絡条体圧痕が施され、2条2単位の上部の区画内では弧状に、下部の区画内では斜位に絡条体が押圧される。横位区画の下位は山形に絡条体圧痕が施される。地文は撚糸文である。隆帯をもたないが、横位区画の絡条体圧痕文による装飾効果は1類の隆帯とは口縁上位の部位、第4図1、2の如く斜位に絡条体が押圧される点で共通する。1類の隆帯は前述の如く男女倉C遺跡例で絡条体圧痕2条1単位による文様区画であったものが、高風呂遺跡39号住居例では低隆帯化、低隆帯上に縦位に絡条体が押圧されて低隆帯が装飾の意味合いをもちだすが、その系統のものである（第6図）。ただ1類の系統の隆帯とは別に隆帯をもたずに2条1単位の横位区画の絡条体圧痕が装飾の意味合いをもちだす系統がある。第3図10の向六工遺跡例は2条1単位の絡条体圧痕の横位区画内に縦位に絡条体が押圧されるが、それである。第5図7は向六工遺跡例の系統をひくものであろう。7には石山式と天神山式系土器が伴出するのは前述のとおりだが、1類との装飾効果の類似性では7を「膳棚B式」の範疇で理解することが



1・2 有明山社遺跡 2 百駄刈遺跡 4 男女倉C遺跡 5・6 ほうろく屋敷遺跡
7～11 門前・の場遺跡 12～16 海戸丸山遺跡

第5図 「膳棚B式」



第6図 (中沢1994aより)

できる。7は石山式併行と考えられ、「膳棚B式」後半としたい。なお蛇足だが、縄文施文で波状文の天神山式系土器は天神山式併行で中部高地の土器群に縄文施文手法が卓越する従来の見解を保証する資料といえよう。8は横位1条の隆帯上には縦位に絡条体が押圧され、以下器面には縦位とX状に絡条体圧痕が施される。9は横位区画の絡条体圧痕以下に縦位、X状、弧状に絡条体圧痕が施される。8は隆帯の部位が明確でないが、1類に相当する可能性が高い。8と9の隆帯や横区画の絡条体圧痕以下の意匠は4類と共通する。8と9は7と同時期であり、「膳棚B式」の範疇で考えたい。

長野県岡谷市海戸丸山遺跡 海戸丸山遺跡では第5図12、13、16の口縁上位に横位1条の絡条体が押圧された隆帯をもち、器面には横位多段で絡条体圧痕が施されるもの、第5図14、15の横位、縦位、斜位、「X状」に絡条体が押圧されるものが出土した。

地文は撚糸文である。口縁上位の隆帯では1類に共通し、器面の絡条体圧痕の意匠では5類に共通する。海戸丸山遺跡ではこの他、「膳棚B式」とは異なる絡条体圧痕文土器や東海系の粕畑式、上の山式、天神山式も出土し、早期末の土器群も時間幅をもつようだが、12～16は「膳棚B式」としてよからう。

なお筆者はかつて本例を膳棚B遺跡1号住居に後続し、梨久保遺跡23号住居a、75号住居下層に併行する見解を示した(中沢1993)。その微妙な時期関係は今も検討課題ではあるが、その折に触れた「横方向多段の絡条体圧痕は弧状多段の絡条体圧痕からの変化」とする仮説は撤回したい。

長野県和田村男女倉C遺跡 1970年代において茅山下層式に近似する時期に絡条体圧痕文土器の存在を指摘した、中部高地の早期末土器研究の学史において重要な意義をもつ遺跡である(笹沢1975)。今日の見解ではSK11、15出土資料をはじめとするその代表的な資料は茅山上層式併行となるが、遺跡からは上の山式から入海II式まで出土している。第5図4は発達した隆帯上に絡条体が縦位に押圧され、その上下に横位に絡条体が押圧される。隆帯の部位が判然としないが、その発達した隆帯の形状は1類に類似し、「膳棚B式」のものである可能性が高い。おそらく遺跡で

出土した入海Ⅱ式に伴うものであろう。

長野県松川村有明神社遺跡 絡条体圧痕文＝子母口式とする見解が一般であった1960年代において、中部では早期末～前期初頭に絡条体圧痕文土器が存在する点を樋口昇一が先鋭的にその報告で指摘した点は中部高地の早期土器研究でも銘記されるべき遺跡である(樋口1969)。第5図1は「膳棚B式」1類に相当。2もおそらく同じであろう。

長野県伊那市百駄刈遺跡 百駄刈遺跡では入海Ⅱ式、天神山式、「塩屋式」などが出土し、東海編年の視点で時間幅をもつが、第5図3は「膳棚B式」1類に相当する。

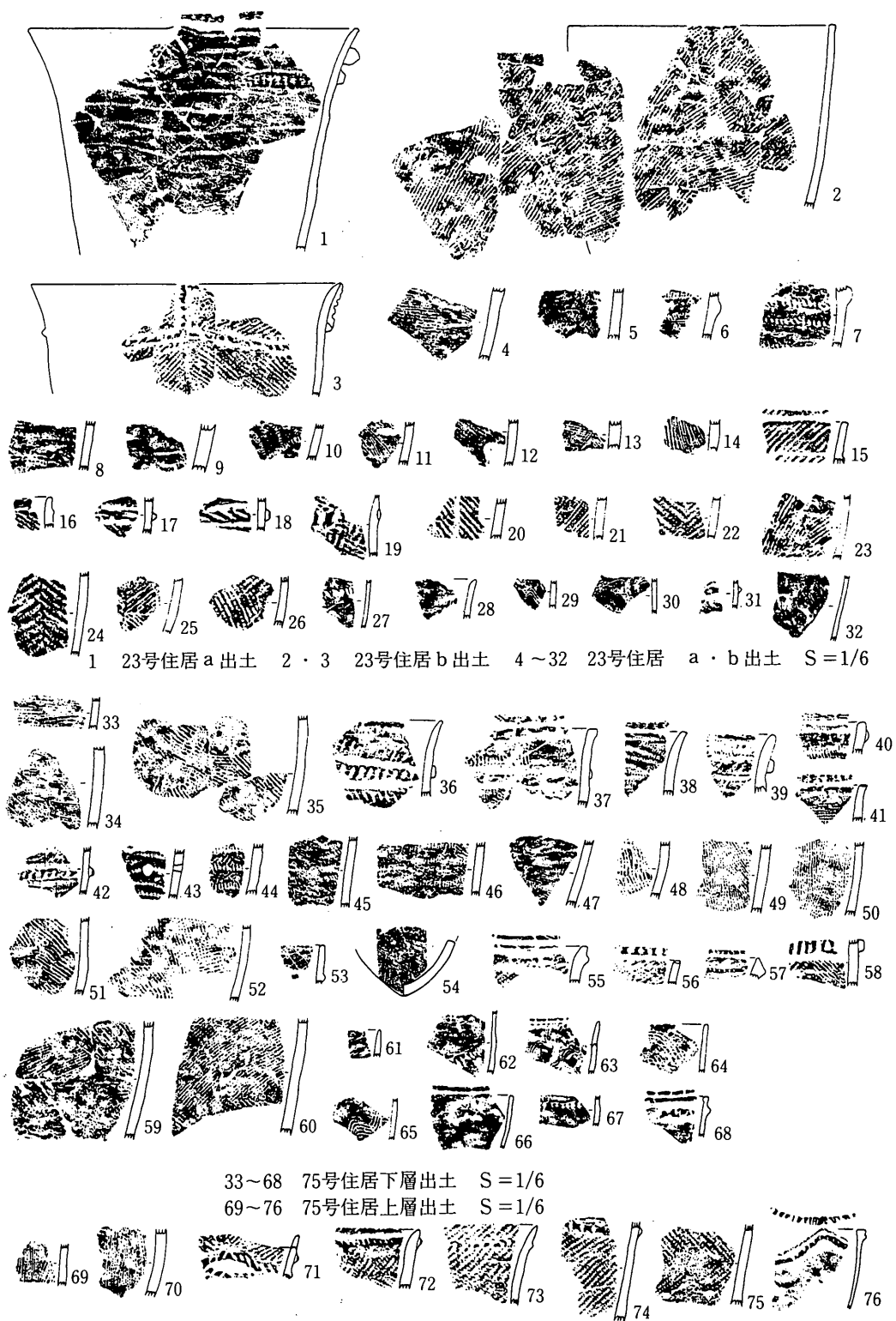
長野県茅野市よせの台遺跡 第5図17は「膳棚B式」1類に相当するが、波状口縁を呈し、波状口縁に沿って口縁直下の隆帯や本来横位多段となる筈の絡条体圧痕は曲線の構成となる。

以上断片的な資料だが、「膳棚B式」が松本盆地、諏訪盆地などに分布することが確認できる。

3 「プレ塚田式」の検討

「膳棚B式」を検討するにあたり、課題となる点が縄文施文の有無である。基準資料たる膳棚B遺跡には縄文施文の土器は見当たらない。今後「膳棚B式」に組成する縄文施文手法が確認されても、量的に多くはなかろう。「膳棚B式」は前述のとおり入海Ⅱ式から石山式に併行しうるのが、縄文施文手法は早期末でも石山式のある段階か天神山式併行以降に卓越し、前期初頭「塚田式」「中道式」の成立母胎ともなるものである(中沢1994、中沢・賛田1996)。

早期最終末の縄文施文卓越の事象理解の鍵となる資料は梨久保遺跡23号住居、75号住居出土資料であろう。23号住居a・75号住居下層と23号住居b・75号住居上層で時期差となる。23号住居ではaをbが切る。aでは第7図1の撚糸文地文で絡条体が押圧された隆帯をもつ絡条体圧痕文土器が、aを切るbでは2の縄文施文土器と3の羽状縄文に刻みをもつ細い隆帯が貼付される土器が出土し、aとbの資料が混在するものでは4～32の絡条体条痕、撚糸文地文、羽状縄文などの縄文地文の絡条体圧痕文土器と東海地方早期末の石山式、天神山式が出土した。1は口縁やや上位程度の部位だが、絡条体で押圧された隆帯をもつ。「膳棚B式」とは隆帯の部位以外差異はない。また6～10も「膳棚B式」と大差はない。一方、bの羽状縄文に逆T字状の刻みをもつ隆帯が貼付される3と縄文施文の2は明らかに「膳棚B式」と異なる。なお2の逆T字状の隆帯が「塚田式」の隆帯の一列に連続する点は既に指摘した(中沢1994)。23号住居a・bの切り合い関係は早期末編年の構築に重要だが、a・bに明確に帰属する遺物が1～3の3点のみであり、4～23の資料はa・bいずれに帰属するか不明である。出土状況での検証の観点ではこれが限界である。23号住居だけではaの1と「膳棚B式」の関係、縄文施文土器の組成状況などは検討できない。75号住居下層の覆土では撚糸文地文で絡条体が押圧された隆帯をもち、器面には横位などの絡条

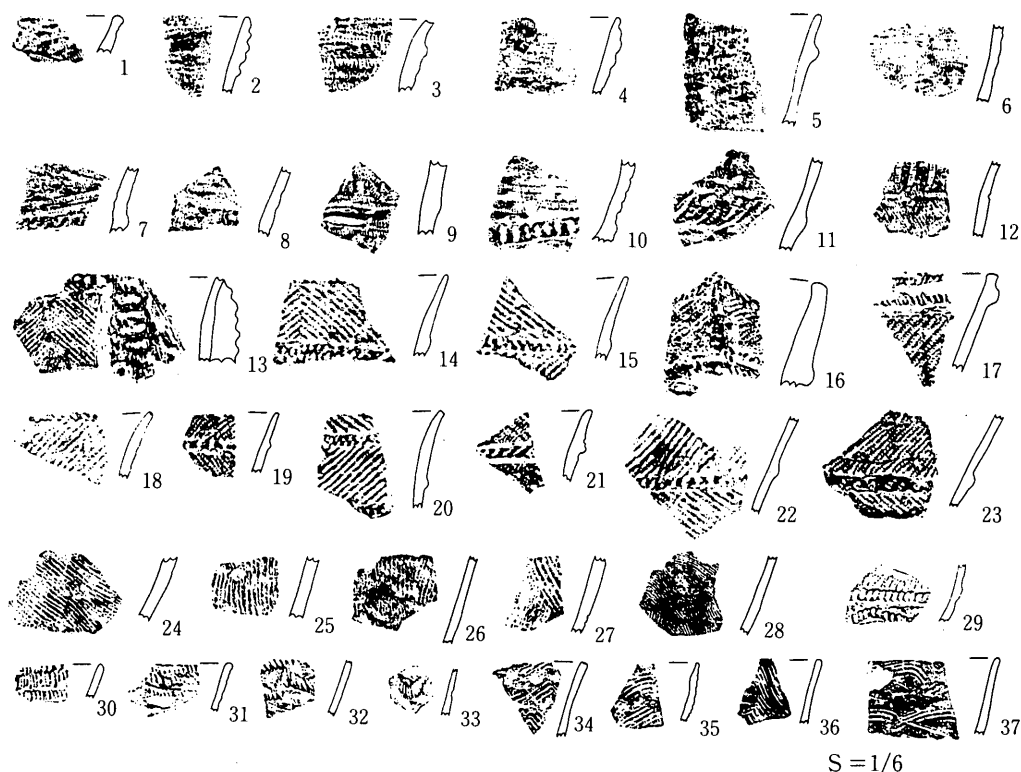


第7図 梨久保遺跡23号・75号住居址出土資料

体圧痕文をもつ36、37、39、40、42、撚糸文地文で横位多段の絡条体圧痕文の44～47、絡条体条痕文土器の33～35、撚糸文土器の48～52、刻みのある細い隆帯をもつ縄文地文の55、57、58、縄文地文の59、60、無文で刻みのある細い隆帯をもつ68、東海系の石山式の61、62、67、天神山式の63～65が出土する。上層の暗褐色土層では撚糸文土器の69、70、刻みのある細い隆帯をもつ縄文地文の71～74、縄文地文の75、無文で波状口縁、刻み目のある細い隆帯をもつ76が出土する。上層では特に東海系土器の伴出はない。75号住居下層の36、37、39、40、42は「膳棚B式」1類と大差はない。敢えて言えば23号aの場合と同じく、隆帯の部位の差程度である。43～47は横位多段の絡条体圧痕文は「膳棚B式」5類に相当するが、その他に36、39、40、42の隆帯をもつ類も器面は横位多段の絡条体圧痕が施される。75号住居下層資料は「膳棚B式」に類似する点をもちながらも、横位多段の絡条体圧痕文土器がより卓越する点も確認できる。「膳棚B式」と最も異なる点は縄文施文手法の有無である。75号住居下層では石山式の他にそれに後続する天神山式も出土する。おそらく71～74の刻みをもつ細い隆帯の縄文地文の土器は上層でも出土している点から75号住居下層でも後半の天神山式併行の可能性が高いが、それでも75号住居出土資料は石山式併行に縄文地文が伴う可能性も否定できない。「膳棚B式」は入海Ⅱ式から石山式にかけて併行するが、石山式と天神山式が共伴する梨久保遺跡23号住居a・75号住居下層でも石山式に併行すると想定される部分と比較するにおいて、横位多段の絡条体圧痕がより卓越する点、縄文地文の出現が微妙な差異と指摘できる。「膳棚B式」と梨久保遺跡23号住居a・75号住居下層出土資料の古い部分が石山式の段階細分で理解可能な微妙な時期差をもつのか、梨久保遺跡例が「膳棚B式」の範疇で理解できるのか否かは今後の検討課題としたい。

梨久保遺跡23号住居a・75号住居下層に後続するのが23号住居b・75号住居上層出土資料となり、これが早期最終末の資料となる。本稿では前期初頭「塚田式」との連続性を考慮し、便宜的に早期最終末「プレ塚田式」と扱う。縄文地文に刻みのある細い隆帯をもつもの、無文で刻みのある細い隆帯をもつもの、縄文、撚糸文、無文土器が伴う。ただ型式学的検討では23号住居a・75号住居下層でも新しい部分の縄文地文に刻みのある細い隆帯のものと分離できない。これらも「プレ塚田式」に包括する。東海との編年対比では天神山式併行及びそれ以降となろう。縄文地文では23号住居a・75号住居下層で既に羽状縄文が出現しているが、「プレ塚田式」でも同様だ。71～74の縄文地文と76の無文の刻み目をもつ細い隆帯をもつものについて、隆帯のみを比較する限り共通する。ただ76を関東の早期末神之木台式に比定する見解があるが、神之木台式の隆帯とは異なり直接対比はできない。また「膳棚B式」1類の系統を引く隆帯でもない。71～74、76の隆帯の系統は現状では判然としないといえる。

さてでは「プレ塚田式」を基準にそれに近似した時期の資料を概観する。ここで確認できることは「プレ塚田式」と「塚田式」とは縄文地文や逆T字の隆帯の属性以外では型式学的連続性を



第8図 松本市坪ノ内遺跡出土資料

十分に指摘できない点である。本遺跡早期III群と扱った資料でも同様である。絡条体圧痕文の意匠や隆帯で「膳棚B式」からの連続性は指摘できるが、「塚田式」への連続性は縄文地文のみになってしまう。現状は型式学的検討を将来に据えた資料蓄積の段階である。

長野県松本市坪ノ内遺跡 坪ノ内遺跡では土器集中区から早期末から前期初頭の土器群が出土した（島田他1990）。第8図29、32、33の入海II式から第8図34～37の天神山式、また「塙屋式」も出土し、東海編年によると時間幅をもつ。「プレ塚田式」と俎上に載せるのは13～15、17～23である。16は前期初頭の「塚田式」か中道式であろう。13は垂下する隆帯上に絡条体圧痕が施され、地文はLRとRL 2種の原体による羽状縄文となる。隆帯は垂下するのみなのか、逆T字となるか判断としないが、垂下するのみならば第5図6のほうろく屋敷遺跡例など「膳棚B式」で散見される垂下する隆帯の系統といえ、また逆T字隆帯ならば「塚田式」につながる系統という。第8図14、15、17～23は梨久保遺跡23号住居・75号住居上層で確認された口縁部付近に刻み目の細い隆帯をもち、羽状縄文地文の例と同類であろう。1～12は「膳棚B式」の範疇で理解できるが、その一部が13～15、17～23と組成する可能性はある。24～28の撚糸文土器は「膳棚B式」か「プレ塚田式」のいずれかに伴うものであろう。

長野県御代田町塚田遺跡 下平博行、贅田明は塚田遺跡出土資料をもって中道式に先行する中

部高地の前期初頭「塚田式」と型式設定されたが（下平・贅田1994、下平1994b）、塚田遺跡では縄文地文の絡条体圧痕文や沈線文土器が出土している。土器様相は川原田遺跡早期第Ⅲ群土器に類似する。同時期のものであろう。本遺跡早期第Ⅲb土器に相当する縄文地文の沈線文土器について下平は東北の早期末土器群との関連を指摘している（下平1994a）。また第9図16の早期末の貝殻腹縁文土器も出土している。

長野県御代田町辰場遺跡 柳沢賢次氏実家の畑地より長芋の耕作中に出土した資料が第9図17の完形土器であり、筆者らが資料紹介したものである（中沢・贅田1996）。縄文地文はLRの原体を横、斜めと施文方向を異にした羽状縄文で、口縁部付近に横位多段に絡条体圧痕が施される。横位多段の意匠の絡条体圧痕文が時間幅をもつ点は前述のとおりだが、梨久保遺跡75号住居出土資料で判断する限り、この時期横位多段の絡条体圧痕が多用されるようだ。

長野県御代田町川原田遺跡 報告でまず下記の大きな分類を行った。

早期第Ⅲa類（第10図1～10、13、16）絡条体が押圧される土器を一括。

早期第Ⅲb類（第10図11、12）沈線が施される土器を一括。

早期第Ⅲc類（第10図17）爪形文土器を一括。

早期第Ⅲd類（第10図14、15）低隆帯をもつ土器だが、本類は前期初頭に下る可能性あり。

第10図5～7の如く、本遺跡でも横位多段構成の絡条体圧痕文土器が確認される。ただこれは「プレ塚田式」で卓越する一方、「塚田式」には続かない系統のようだ。10の縦位、斜位が組み合わさる意匠は「膳棚B式」から連続する。16の弧状の絡条体圧痕も「膳棚B式」からの系統だが、この時期もその手法が残存することを示す資料といえる。

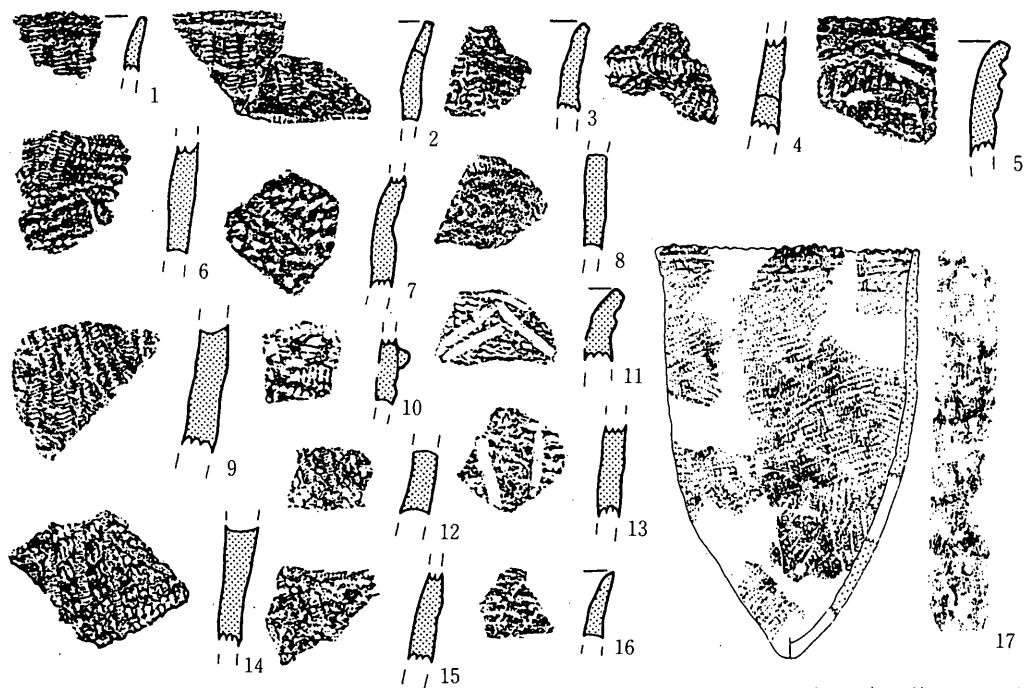
11、12は塚田遺跡の報告で下平博行が東北からの関係で理解した沈線文土器である（下平1994a）。筆者自身は東北の早期末に不案内でその評価はできないが、この時期に佐久方面で早期末の沈線文土器が存在する点は確かである。

本遺跡の土器様相は塚田遺跡と類似する。以上、「塚田式」の直前の土器群を資料集成、また「プレ塚田式」と仮称、概念化し、その中で本遺跡早期第Ⅲ群土器の位置づけを簡単に試みた。当然将来的にははしかるべき型式名を冠すべきと考えたい。

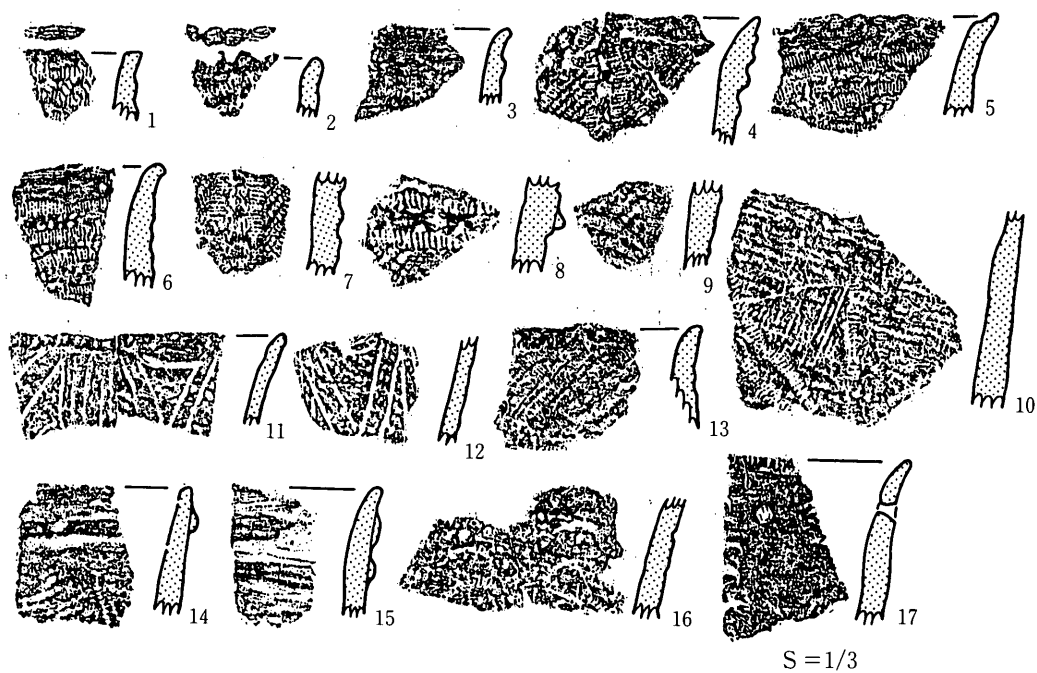
4 結 語

本遺跡で出土した早期末土器群を手掛かりに、これまで中部高地の早期末土器編年について述べてきた。以下にその概略をまとめる。

- (1) 中部高地の早期末の土器編年では、佐藤信之が「貝殻条痕をもつものから、絡条体条痕を施すもの、そして燃糸文へと変遷」と指摘して以来の地文による変遷案と東海編年への傾斜が大



第9図 御代田町塚田遺跡・戻場遺跡出土資料 17は $S=1/6$ 、他は $S=1/3$



第10図 御代田町川原田遺跡出土資料

きな傾向と言える。地文変遷案と東海編年への傾斜は今日においても一定の有効性を保ち、筆者も含めそれを目安とする部分も大きい。従来の研究においては東海系土器の認識を含め、些かの問題を生じているようだ。筆者の中部高地の早期末土器群の地文調整の理解は、

① 絡条体条痕の出現は絡条体圧痕の出現と期を一つにし、茅山上層式併行となる。

② 絡条体条痕から撚糸文への変化は研究者の共通認識であるが、撚糸文の出現は入海Ⅱ式併行であろう。

③ 縄文施文は茅山上層式併行まで中部高地では卓越するが、その系統は以降も僅かながら残存する可能性がある。それが再度東北からの影響で卓越するのは石山式か天神山式併行である。この縄文手法は「塚田式」の縄文手法の成立母体となる。

(2) 地文変遷は土器変遷の目安とはなるが、縄文土器編年の方法論に基づき、年代と地域が目盛たる型式を設定し、縄文土器型式の連鎖構造の中で土器を論ずるのが筋であろう。本稿で筆者は岡谷市膳棚B遺跡出土資料を基準に「膳棚B式」を設定した。「膳棚B式」は発達した口縁部横位一条の隆帯や横位多段、弧状、「X」状、横位・縦位・斜位の組み合わせなどの意匠の絡条体圧痕が特徴で、地文は撚糸文、絡条体条痕、ナデによる無文である。縄文地文の存在は判然としない。入海Ⅱ式から石山式に併行する。類似資料が諏訪盆地、松本盆地を主に分布する。

(3) 「膳棚B式」と前期初頭「塚田式」の間に位置づく中部高地の早期最終末土器群について梨久保遺跡23号住居a・75号住居上層出土資料を基準に便宜的に「プレ塚田式」と扱った。将来的にはしかるべき型式設定をしたい。

「プレ塚田式」では逆T字状の細い隆帯や羽状縄文などの属性では「塚田式」に連続する要素をもつが、卓越する横位多段構成の絡条体圧痕など「塚田式」には連続しない要素もある。絡条体圧痕の意匠では横位多段構成や縦位、斜位の組み合わせる意匠など「膳棚B式」から連続する。本遺跡早期第Ⅲ群土器も「プレ塚田式」の時期のものであるが、絡条体圧痕文土器ならず、沈線文土器も伴う。この沈線文土器は下平博行によれば、東北からの影響と理解されているが、今後の資料蓄積の後に議論したい。

註

- 1 第1図bの表中の新段階が「中段階」に相当する。綿田分類では表中第2類a種「貝殻条痕を含む粗大な条痕」、b種「絡条体による条痕」、c種「条の細かい絡条体あるいは木口状の施文具と思われる細かい条痕」となる。

参考文献

- 会田進・小沢由香利他 1986 『梨久保遺跡』 長野県岡谷市教育委員会
- 浅利司他 1990 『中込遺跡』 山梨県教育委員会
- 五十嵐幹雄 1951 『中松井遺跡調査報告』
- 岡本勇 1959 「三浦郡葉山町馬の瀬山遺跡」『横須賀市立博物館研究報告』3 横須賀市博物館
- 小笠原永隆 1994 「琵琶島遺跡採集の縄文土器」『野尻湖博物館研究報告』2 野尻湖博物館
- 小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文土器の一樣相」『信濃』41-4
- 神奈川考古同人会縄文研究グループ編 1983 「縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』17
- 神奈川考古同人会 1984 「シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 記録・論考集」『神奈川考古』18
- 金子直行 1989 『下段遺跡』 埼玉県埋蔵文化財事業団
- 金子直行 1991 「茅山上層式土器の再検討」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財事業団
- 群馬県考古学研究所他 1988 『第2回縄文セミナー縄文早期の諸問題』
- 児玉卓文 1984 『長門町中道』 長門町教育委員会
- 小林康男・百瀬忠幸他 1985 『堂の前・福沢・青木沢』 塩尻市教育委員会
- 近藤尚義他 1992 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1』 長野県埋蔵文化財センター
- 笹沢浩・佐藤信之他 1982 『中央道調査報告書原村その5』 長野県教育委員会
- 島田哲男他 1990 『松本市坪ノ内遺跡』 松本市教育委員会
- 下平博行・賛田明 1994 「長野県に於ける縄文前期初頭縄文系土器群の編年」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
- 下平博行 1994 a 「J-5号住居址出土資料について」『塚田遺跡』 御代田町教育委員会
- 下平博行 1994 b 「「塚田式」の設定とその様相について」『塚田遺跡』 御代田町教育委員会竹原学・島田哲男他 1995 『和田遺跡・桜田遺跡・堂田遺跡・樋渡し遺跡』 松本市教育委員会
- 縄文セミナーの会 1994 『第7回縄文セミナー早期終末・前期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
- 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料第一巻下』
- 壇原長則他 1985 『上林中道南遺跡』 長野県山ノ内町教育委員会
- 壇原長則他 1996 『上林中道南遺跡III』 長野県山ノ内町教育委員会
- 中沢道彦 1994 「塚田遺跡出土早期土器群について」『塚田遺跡』 御代田町教育委員会
- 中沢道彦・賛田明 1996 「長野県北佐久郡御代田町尻場遺跡採集の縄文土器について」
- 賛田明 1994 「前期初頭の土器群について」『下弥堂』 御代田町教育委員会
- 林茂樹他 1995 『的場・門前遺跡』 駒ヶ根市教育委員会
- 樋口昇一他 1969 『有明山社』 松川村教育委員会
- 廣瀬昭弘他 1978 『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』 上水内郡牟礼村教育委員会
- 藤巻幸男 1992 「群馬県における縄文時代早期末から前期初頭土器群の様相」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 毒島正明 1983 「子母口式土器研究の検討」『土曜考古』7 土曜考古学会
- 宮下健司 1989 「東海条痕文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館

- 百瀬忠幸他 1987 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』 1 長野県埋蔵文化財センター
- 百瀬忠幸他 1988 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』 2 長野県埋蔵文化財センター
- 百瀬忠幸他 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 2』
- 森鳴稔・笹沢浩他 1975 『男女倉』 和田村教育委員会
- 守矢昌文 1986 『高風呂遺跡』 茅野市教育委員会
- 綿田弘実 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12』 長野県埋蔵文化財センター
- 綿田弘実 1996 「中央高地における縄文早期末葉絡条体圧痕文土器」『長野県立歴史館研究紀要』 2 長野県立歴史館